

世界紀行文学全集

18

フレンチアメリカ
オーストラリア

世界紀行文学全集

18

ラテンアメリカ・オーストラリア

監修 志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第十八卷

ラテンアメリカ・オーストラリア

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蒔人

総発売元

株式会社はるぶ

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

メキシコ	ある歓楽境.....	三
正宗白鳥	メキシコ市.....	七
田中耕太郎	メキシコ紀行.....	一六
福沢一郎	西半球の中国・メキシコ.....	三
大宅壮一	メキシコ通信.....	四一
沢沢敬三	メキシコ画信.....	四
利根山光人		
キューバ		
木下杢太郎	クウバ紀行.....	五
大宅壮一	砂糖の壺・キューバ.....	六
三島由紀夫	ふしぎな首都ハバナ.....	六
沢沢敬三	ハバナ.....	七
ジャマイカ		
大宅壮一	泉の国・ジャマイカ.....	六
ハイチ		
大宅壮一	黒人共和国・ハイチ.....	七
三島由紀夫	ポルトオ・フランス.....	七
ドミニカ		
大宅壮一	外債皆無の小国・ドミニカ.....	七
三島由紀夫	ドミニカ政府のショー.....	七

渋沢 敬三	ラ・マチカ……………	七六
グアテマラ		
大宅 壮一	『パナナ革命』後のグアテマラ……………	七六
田中耕太郎	グアテマラにて……………	八一
ホンジュラス		
大宅 壮一	バナナで生きる・ホンジュラス……………	八四
エルサルバドル		
大宅 壮一	律義な親日国・サルヴァドル……………	八五
ニカラグア		
大宅 壮一	文盲の騒乱国・ニカラグア……………	八六
コスタリカ		
大宅 壮一	『富める海岸』・コスタリカ……………	八九
パナマ		
石川 達三	パナマ運河……………	九一
田中耕太郎	パナマからグアテマラへ……………	九三
大宅 壮一	小規模の『満州国』パナマ……………	九八
渋沢 敬三	パナマ……………	一〇一
ブラジル		
志賀 重昂	世界三景の第一……………	一〇三
米窪 太刀雄	南米の美都……………	一〇四

石川達三	ブラジル往来記	二五
島崎藤村	ブラジル上陸	二四
田中耕太郎	サン・パウロ市	二五
福沢一郎	ブラジル紀行	二五
中川一政	リオデジャネイロ	一八〇
大宅壮一	鮭紅の町	一八四
渡沢敬三	サンパウロ州とパラナ州	二一
ベネズエラ	ブラジル通信	二四
田中耕太郎	ヴェネズエラ	二六
渡沢敬三	石油の国	二八
コロンビア	常時戒嚴令下のコロンビア	二〇
大宅壮一	ボゴタ	二六
渡沢敬三	リーマ	二四
田中耕太郎	南米第一の排日国・ペルー	二七
大宅壮一	チャンカイ	二四
渡沢敬三	サンチャゴ	二六
田中耕太郎		

大宅 壮一	南北に伸びたチリ	三七一
田 中 薫	アンデスを越えて	二七九
渋谷 敬三	サンティアゴ	二八六
ボ リ ビ ア		
中 野 好 夫	ある隷属国の悲劇	二八七
大 宅 壮 一	南米のチベット・ボリヴィア	二九五
渋谷 敬三	ボリヴィア、ラパス市にて	三〇四
パ ラ グ ア イ		
大 宅 壮 一	海のない国・パラグアイ	三〇七
渋谷 敬三	アスンシオン	三一〇
ウ ル グ ア イ		
志 賀 重 昂	南亜米利加の秋	三二二
大 宅 壮 一	西半球のスイス・ウルグアイ	三二五
渋谷 敬三	モンテヴィデオの池と市場 メルカド	三二八
アルゼンチン	三二八 ポンチヨ	
志 賀 重 昂	亜爾然丁独立一百年祭	三三〇
島 崎 藤 村	アルゼンチンよりブラジルへ	三三四
田 中 耕 太 郎	ブエノス・アイレス	三三六
渋谷 敬三	アルゼンチン通信	三三八
田 岡 典 夫	童話的一天	三三九
	三三九 ブエノスの午後三時	三四三

林	アルゼンチン一瞥……………	三四
オーストラリア		
志賀重昂	ウエントウオース谿……………	三五
米窪太刀雄	フリーマントル……………	三五
飯塚浩二	オーストラリア・ニュージールランド紀行……………	三五
執筆者・出典一覧……………		三七
地		
図	メキシコ、ジャマイカ、ハイチ、ドミニカ、キューバ、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、ブラジル、ベネズエラ、コロンビア、ペルー、チリ、ボリビア、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチン、オーストラリア……………	(巻末)折込

ラ
テ
ン
ア
メ
リ
カ
オ
ー
ス
ト
ラ
リ
ア

ある歓楽境

正宗 白鳥

クリスマスも過ぎ、今年も余すところ二三日となった。しかし、年末の感じなんか少しもない。温いカルホルニアのうちでも、最も南端に位しているこの町は、ことに氣候が温暖で、日中の日光は軽井沢の真夏のような勢をもっている。この辺一帯に四季を通じて寒暑の差はわずかで、年中春のようであると云われているが、それは温度の上だけのことで、我々が春という言葉から連想するような情趣はそこに漂っていないのである。カラカラと晴れていて、明るくて温いだけのことなのだ。雨のない土地だから山も海も乾いて禿げている。こんなに禿げていて、地味が豊沃で、野菜や果物の産出に於ては世界無比だと聞くと思ひに思われる。

このサンデアゴの町からメキシコの国境までは僅か十数哩を距てているばかりで、その国境を越えたところにチワナという町がある。天下晴れての賭博場があるので有名だ。禁酒国の米人も、そこでは、公然酒を飲んで享楽を恣にするので賑わっている。

サンデアゴから乗合自動車で、賃銀半弗、時間が二十分。此処まで来ていて、その町を一瞥しないで帰るのは如何にも残念に思われたが、「しかし、物騒なところですから、様子を知った日本人に案内してお貰いになったらよろしいでしょう」とある知人が忠告した。

以前は夜の十二時まで公開されていたのだが、近頃、ある白人の女が、ある夜メキシコの警察署長に凌辱された。そして、その女の一族は、有色人からこんな極度の侮蔑を受けては世間に顔向けがならないと云って、一家挙つて自殺を遂げた。そういうことが大問題となつて、国境の関所は六時に閉鎖されることになった。「名譽を傷つけられたために一家挙つて自殺するというようなことは、アメリカでは珍しいことです。しかし、その白人の女というの、泥酔して警官の保護を受けて、ホテルへ連れ込まれたというんですから、アメリカ式に警官に秋波をおくって押搦ったりなんかしたんでしょ」と、私はあとで、ロスアンゼルスのある知人から聞いた。

「ある日本人で、一度五千弗ばかり賭博で儲けたものがありました。あの町には銀行が出張所を出しているから、儲けた金は一先ず預けとけばいいのに、大事を取って自分の懐中にしつかりしまつて汽車に乗つて、サンデアゴへ帰ろうとすると、例のホルドアップがちゃんと嗅ぎつけていて、汽車の中でその日本人の膝をぶつて、便所の方へ行けと小声で云うんです。二度頭を振つても、悪漢のピストルが腹の方へ向け

られていたんだから拒みきれなかつたんです。それで、悪漢の云うなりになって、五千弗そっくり取られた上に、汽車から飛下りて怪我をしたそうです。汽車の中の外の客はそれを見ていても知らん顔をしている。金を有っている者から捲上げるのは当たり前だといった風で、アメリカではホルドアップを痛快に思う傾向があります」

それに似た物騒な話をいくつも聞かされた。ことに、日本人に対して、関所の役人の取調べが峻厳であると脅やかされたので、私は独行を躊躇していた。しかし、この加州最南端の小都会サンデアゴにての滞在もすでに十日に達して、大晦日には、ロスアンゼルスへ「ニューイヤースイープ」の馬鹿騒ぎを見るために後戻りすることになっていたもので、年末の二十九日には、一人でそこへ行こうと思立つた。

「じゃ私が御案内しましょう」と、ドルクトルKと呼ばれている、見るからに好人物らしい禿頭の日本人が、自から進んで云つた。

偶然、画家M氏夫妻も同行することになった。M氏は春まで、この町に滞在して、気ままに制作に耽る目的を立てて、郊外の静かな所に一家を借りていた。二三日前私達はじめて氏の訪問を受けて、その仮寓に招かれて、半日、日本の話や欧米の話をして過した。こちらの借家は、身体さえ持つて行けば快く住めるように設備が整っている。

「欧州よりも、米国の東部よりも、カルホルニアの貸家の方が、住心地がいいように出来てい

ます」と、氏は云った。

冬の間こういう家に住んで、四月頃になって東部へ足を進めた方がいいのではないかと、会う人々に忠告されて、私達もそう考えたが、しかし、上陸したばかりで一カ所に停滞しているようなのが物足りなかった。

「小山内君が亡くなったそうですが、あなたはお知合いじゃないんですか」と、私は、前日一瞥した邦字新聞の記事を知らせた。

「小山内君が亡くなった？……小山内君とは懇意にしていましたよ」

死者に対する追懷談がおもむろに氏の口から出た。やがて、我々は近くの公園など散歩して、夕方私達はM氏夫妻に見送られて宿の前で別れた。

「停車場へお見送りはいたしませんか、どうぞお大事に。……お気をおつけなすって」

私達は離別の語を聞いたのであったが、ドクトルKは、「一人案内するも二人案内するも同じことだ」という訳で、その夜M氏を訪ねてチワナ行を勧めて来た。

翌日、正午近くなつて、私達とM氏夫妻との四人は、ドクトルKの、窓のない古ぼけた自動車に乗せられて出立した。こちらへ来て十日間、雲の片影も見なかったが、この日も、日本では見ることの稀れな完全な「日本晴れ」で、大晦日前の日光は、赫々と躍っていた。土曜日ではあるし、チワナ街道には、自動車が幾台となく、疾風の如く駛っていた。私達は絶えず後の車に乘越された。K氏がふと自動車を路傍に留めた

ので、故障でも起つたのかと気遣うと、氏は、青い葉の出ている一面の島を指差して、

「みんなセロリ島ですが、あの青々とした出来のいいのは、極めて日本人の作ったもので、黄ろい枯れつ葉のあるのは白人の島です。だから白人がジェラシーを感じるんです」と説明した。

国境では、米国官憲の取調べを受けなければならなかった。旅券を見せて、帳簿に署名して、多少の質問にも応じなければならぬ。米人ならそんな面倒な手続きの必要はないのに、我々異邦人は、ことに日本人なるが故に、余計な猜疑をもつて見られるのだから、甚だ不愉快である。しかしメキシコ国境を潜行して米国へ浸入する日本人を防ぐために、この国でも苦勞しているのであらう。メキシコ側の役人の検査を受けるのだが、この方は自動車の窓から自己証明の紙を見せるだけなので、甚だ簡単である。

米国とメキシコの国境には、ただ針金の柵が引張つてあるばかりである。一步国境を越えると、道路は全く面目を異にしている、文野の標本を示している。砥石のような滑かな道路が、メキシコ領へ入ると、日本の道路の思出されるように、デコボコの、埃りっぽい道となるのである。路傍の人家も粗末である。茫漠たる原野の一端に、この町は、ただ賭博場としてのみそこに存在しているのである。

ここには、世界に例のない「犬の競争」があつて、それが賭ける事に用いられているのだが、普通の「競馬」と半年交代で、今は「競馬」時節なのである。入場券は二弗だが、婦人は普通

半額でしかも一週に二日は無料なので、ここでも、米国の「婦人第一」ということがよく現われている。

「兎に角、何処かで簡単に午餐を食べましょう」と、M氏が云つて、「ボヘミア」と看板に書かれた、地方色の現われている小さな食べ物屋へ入った。老若の色の黒いメキシコ女が薄汚い食卓を取扱っていた。言葉は西班牙語らしくて、英語はよく通じないらしかった。しかし、食物は、パンでもビフテキでも案外にうまかった。

「此処は西班牙料理だから、アメリカと違つて風味がある」

「男の方へ先きに皿をくばるなんかも變つている。アメリカでは絶対にないことだ」

非常にボラれると聞いていたのに、料理代が案外に安かつたのも、我々を感心させた。

アメリカの市街を見た目にはひどく薄汚く思われるそこらのごろごろした街上の人家の多くは、売店や酒場や食物店であつたが、酔つて女給と踊っている客もあつた。

「ちょっと酒場へ入つて、女どもを相手にすると、十弗や二十弗の金は直ぐ飛んでしまふ。何人もの女がみんな酒を飲ましてくれと云つて、次ぎから次ぎへとやってくる。ウイスキー一杯七十五銭だが、そこには仕掛けがしてあつて、女の飲む酒は、色のついた水なんです。それで、客に払わせた金は、あとで、女給と主人とが分けて取ることになっている」と、このチワナで働いていたことがあつて土地の事情に明るい、私の宿の主人が云つていた。

賭博場としては徹底していて、大抵の店には、自動賭博器が備えつけられてあった。五銭のニッケルとか、十銭とかで一弗ぐらゐは転がり出ることになっている。全体機械文明の進んでいるアメリカでは、自動車は極度に発達しているのみならず、いろいろな物が自動的に行われるようになってゐる。小さな貨幣を穴へ入れると、キャンデーとかチューイングガムの類が出て来る器械があると同様に、一銭か五銭の貨幣を入れると、覗き目鏡で絵が見られるようになってゐる。私は、ロスアンゼルス市のサンデアゴの町で、試みに覗いて見たが、それ等の絵の多くは、さまざまな姿態をした女の裸体もあった。要するに、世の中は金と女の天下である。日本だってそれに vari は無いのだが、日本の方が煮え切らなくて、アメリカにはそれが直截明瞭に現われているのであらう。

「婦人第一」「ドル第一」毎日新聞を見ていても、ドルに関する事件が頻りに目につく。価格の安い日本金の一萬や二萬を後生大事に旅行費として持っていて、それくらい金はこのアメリカでは鼻つまきくらいにしか当らないように思われる。

しかし、それほど豊かなアメリカにだって、貧乏人もあるに違いない。それ等の貧しい労働者なんかは、一銭、五銭の自動器を覗いて、安価なる享樂を試みているのが、私の目にもついていた。

私達の乗った自動車は、町を離れて、二三哩走った。周囲は荒涼たるものである。自然の風

物は、人間の飲樂境の背景たるに相応しくない。Kドクトルは、「犬の競馬場」の在所だけでも、私達に覗かせようとして道を進めているのであった。「犬の競馬はお笑しい」と我々は笑っていた。

が、予定の地域へ来ると、そこには、佳麗な建物が、竜宮城のように我々の眼前に現出した。「何だろう」と、案内者たるK氏さえ疑った。あまたの美しい自動車が事ありげに並んでいた。赤い瓦に白い壁で、このあたりだけは青い草木で色取られてあった。私などには、色彩の濃い建築は、何でも支那風として見られるのだが、M氏の説明によると西班牙風なのであった。一つの建築はホテルらしかった。青いズボンを着けた男が、着飾った男女を案内していた。一つの建物の入口には、黒人やメキシコ人などが、顔に似合わぬ氣取った服装で身を固めて番をしていた。そこらにいる客は、いずれも華美な装いを做っていた。我々はつけつけとそこへ侵入するのが躊躇された。

「賭博場」だろうと我々は想像した。折角此処まで来て、内を見ないで帰るべきではなかった。それで、M氏は、番人のメキシコ人に訊いた。「入ってもいいか」「ちよつと待ってくれ」

番人はそう云って、奥へ入ったが、間もなく出て来て、「よし」と云った。

我々五人は、不調和な世界に入つて行つた。一室の賭博場には、十台ばかりの艶のいい滑かな賭博台が配置されて、その一つ一つに、いか

にもメリケン国の紳士然たる顔をした、中年の男が、地質のよきような黒色の衣服に純白のカラーを胸に浮かせて、座を占めていた。ある者はトランプを切り、ある者は賽をころがしていた。トランプの勝負にも三種違った方法が用いられていたやうであつたが、多くの人の興味は、玉ころがしの上に集つてゐるやうであつた。どの台にも、弗の銀貨が、支払い準備の資金であるらしく、幾列にも配置されてあつた。燦然として色を放つて、見る人の目を眩惑させた。そして、この賭博場の中は案外寂然としていて咳をするのも足音を立てるのも憚られるやうだつた。見窄らしい服装をしているのは、我々の一行だけであるらしく、あたりの淑女紳士は社交界の登場人物として扮装していた。私などは何処へ行つても「演劇を見る人」であつて、こういう所へ来てもさして賭博心は刺戟されなかつた。見てゐると、賭博者に勝ち味の無いことは一目瞭然としているやうで、勝利を予期して贅を投げるものは阿呆のように思われた。「玉ころがし」は最も客の興味を惹くものらしかったが、その台には、三十六まで数字が記されてあつた。三十六に一つの当りを僥倖するなんか愚の至りであるが、その代りうまうま當つたら、何倍にも何十倍にもなつて返つて来るのであらう。しかし、滅多に當るものではなくつて、かの紳士然たる顔した支配人の手にした小さな棒によつて客の銀貨は、つねに手元へ掻寄せられていた。傍觀者の目には戲談見たいに事が運んでいった。客の数は男よりも女の方が多いくらいであ

った。ある妙齡の女は、割合に当選率の多い賛
投げをやっていたが、四五弗せしめると、ニヤ
リと笑って出て行った。

「モナコよりも勝負が敏活で面白いですよ。そ
れに、モナコでは、こんな側へ寄つて覬く覬に
は行かないんで離れて見ていなきゃならないの
です」と、M氏は説明した。

「モンテカロ」とか「カシノ」とかいう言葉を、
私は昔聞いた時から、日本などでは見られない
特別の場所、人間の異常の歓楽となる遊戯を示
す言葉のように思っていたことがあったが、自
分の身をこの場内に置いて左顧右眄している
と、享楽の血汐がわが胸に涌いて来るよしもな
かった。「運命の針が動いている」と観じて賭
博台を見ている、そこには私自身の運命が賭
せられているのでないから、何の刺激にもなら
なかった。

「自分でこの空氣に同化しなきゃ駄目ですな
あ」と、Kドクトルが云っていた。

賭博も打たず酒にも酔わず、ダンスもしない
で、この境内をうろつくのは、随分間の抜けた
ことなので私には、次第に濃厚な色彩の動揺し
ている周囲よりも、自分達一行の、「田舎者の
盛り場見物」じみた気分が気になりました。

賭博場は静かだったが、壁一重隔てた中央の
食堂では、メキシコの楽人の数人が、人の心を
浮立たせるような音曲を頻りに奏して、そこ
では、米國禁制の酒がはしいままに飲まれて
いた。その隣りの奥まりたる薄暗い部屋では、
ダンスが行われていた。

「この名前は何と云うんでしょう」と、私は、
外へ出てからK氏に訊ねた。

「さあ。……この辺を温泉場と云っていたんで
すがね。温泉が出たんだそうですが、白人は温泉
を好まないから物にならなかったんでしょう」
Kは直ぐ側にある柵の中の空地を指差して、「こ
こが犬の競争のあるところです」

賭博心のないK氏などは、近所に住みながら、
この佳麗な歓楽境が何時出来たかも知らなかつ
た。

「これだけ見たら沢山だ」

皆んな、珍しい所を見て、一種の満足を覚え
たのであったが、しかし、その実、紅い雲の一
片を見て通つたに過ぎなかつた。こちらへ来て
から、殆んど一月を経たのであるが、要するに、
紅い雲や黄ろい雲の浮動を見ただけで、物の心
核など分りつこはないのであった。

後で聞くと、薄汚い服装をした者、醜惡な顔
付をした者は、かの場内へは足を入れさせない
ので、我々は辛うじて入場者の資格に及第した
のであった。

「あれが私娼の家です」と、町へ戻った時に、
K氏は、外觀の薄ら淋しい板小屋を指示した。

チワナへ行つて女を買つたと云つて、大散財で
もしたように自慢する正体があれだと思ふと可
笑しい。

「洋行者の享楽話」について私は考えた。

有名な競馬場へも回つたが、時間が遅いので、
入口を覗いただけで引返した。出口では、来た
時よりも一層嚴重な取調べを受けた。白人以外

の我々は皆んな車を下りて、米國官憲の前に謹
慎して、その意に逆わぬように、質問に応じな
ければならなかつた。

「チワナの町へは毎日散歩に行つてもいい。大
して危険なこともなさそうだが、罪人同様に調
べられちゃ、二度と行く氣にやなれませんか」
私がそう云うと、

「あそこから先きのメキシコの海岸をドライブ
すると面白いんです。崖道が曲りくねつて変化
があつていいんです」K氏は答えた。

地味の豊沃を以つて誇っているカルホルニア
も、以前は、メキシコの領域であつたことは、
各所の地名が、スペイン語を示しているによつ
ても察せられる。強者の拡大と弱者の衰頹は、
我々旅人の目にも明かに映るのである。

(昭和十年十二月末日サンデアゴにて)

メキシコ市

田中 耕太郎

九月二十三日 快晴 グアテマールよりメキシコ市へ

午前四時起床、六時半飛行場に至る。雲高く、市の西方に屹立している海拔一三、九八〇呎のフエゴの容姿が秀麗である。其の形は富士に酷似する。一国の首府が斯様に近く名山を有することは独特として誇るに足るのである。

間もなく右側の山嶽地帯に瑞西に見られるような湖水がある。地図で見ると、是れ恐らくは首府より遠くないアマティートラン湖であろう。

メキシコ領内に入る

午前八時半メキシコ領のタバチュールに到着する。飛行場は茅葺である。インディアン製の品の売店があり、田舎じみた地方色を示している。官憲側の入国の手続を終え、九時過ぎにメキシコ市に向う。機は海上を飛び、一二、〇〇〇呎以上の高度を持ち、呼吸困難を覚える。然し非常に平靜であるから、読み書きも陸上に於けると全く変わりなく出来る。或は海上に或は陸上に、河川や湖水や山嶽の絵巻物の展開が応接

に暇ない。

機は海岸線から遠ざかり、山嶽地方に入る。山の肌は漸次灌木の斑点を以て被われ、西班牙やアルゼンチンのコルドバ付近の山地を思わせるものがある。突如雲上から眩しいばかりに白く輝く火山系の秀峰の頂を見る。ポボカテペトル（一七、七八〇呎）である。多数の美しい教会で飾られた相当の大都會の真上を通過する。初めはメキシコ市に到着したかと思ひ違えた。此の町は人口一〇、〇〇〇余の有名なプエブラと言う山間の都であり、歴史的美術的建築物が非常に多い。「天使の都」と呼ばれているのは数百の教会を有するからであらうか。

峠を越えて約十分、十二時十五分頃首府メキシコに到着する。越田公使、福島通訳官、原田公使官補、海野同盟通信社員の諸氏の出迎を受けた。原田氏は東大経済学士、海野氏は同法学士、共に昭和十年度の出身である。

公使館に遠くないホテル・マンテールホに入る。アペニデーに面し閑静で家族的な感じである。

越田公使の案内にて市の内外殊にチャブルテベック公園をドライブする。大木の緑蔭は芸術的な建築と相俟つて、言うに言われぬ落ち着いた感じを与える。海拔七、四三四呎の高地にあって四季の氣候に大差がなく、常に花咲き樹が緑である。郊外の道端や野原には一面にコスモスが咲き乱れている。此の可憐な花がメキシコのオリジンと聞いて驚いた。

越田公使官邸に午餐に招待せられた。其の食堂たること蓋し私の承知している本邦大公使官

邸中の屈指のものである。堅く白き羊毛様の毛を以て被われた珍奇なサボテンを見る。当国は周知のように変った各種のサボテンの産地として有名である。

午後四時過ぎ福島通訳官を同伴メキシコ弁護士協会会長ビクトル・エム・カスチリヨ氏を其の事務所を訪問する。氏は榎本武揚子爵を知っている。余程の老人に相違ない。

引続いて商店街に赴き、書肆に法律書を渉獵する。私自身の専門に關する当国の學者の著作を搜したが、其の方よりも寧ろ西班牙で出たもの殊にバルセロナ出版のものが多し。尚お西班牙を通して、独や伊の學者の翻訳物が非常に入り込んでいることは注目し値する。

市内目抜き場所にアスレホス張の古風なファッサードの家の前を通る。伊達政宗の頃支倉常長が羅馬教皇庁に使し、一六一三年から一六二一年にかけて海外の旅に於つた際、往復共に当国に立ち寄つて滞在したのであるが、是れは其の際泊した家なのである。此の建物は今は外国人相手の高級なカフェーとなつてゐるのである。

夜伊太利レストランに於て、福島、原田、海野の諸氏から、学生時代の追憶談を聞きながら一夕の飲を尽す。

九月二十四日 快晴 メキシコ

メキシコの教会

メキシコでは一九二六年頃の宗教迫害の際多數の教会が破壊せられ、其の財産が没収せられ、

又聖職者が追われたと言う話を聞いていた。然し斯る迫害は長く続かなかったものと見え、人民戦線派の為政者も礼拝を黙認しないわけには行かず、教会の数が相当多く、弥撒聖祭は非常に盛んに行われているようである。宗教迫害以来多数の教会が廃止せられ、学校に改造せられたそうである。其の以前の盛況想像に余りがある。

ホテルから二ブロック先のボチーバ教会の午前八時の弥撒は立錫の余地がない程であった。之れに続くベネディクシオンの聖体奉挙の際に司祭は欧州戦乱に言及し、世界の平和のために祈るようにとの簡単な説教があった。

午前九時海野、福島、原田三氏の案内に依り、メキシコ市の付近のドライブに出かける。珍しい好天氣に恵まれ、爽快極まりない。

メキシコ国内には先住民族の遺蹟の発掘せられたものが甚だ多い。殊にマヤー(Maya)文明の遺蹟としてユカタン州のチツチェン・イツァ(Chichen-Itza)の廢墟とウシュニヤル(Uxmal)州のマヤーの神殿、トルテック(Toltec)文明に属するものとしてはオアサカ州のミトランの廢墟がある。又アステック(Aztec)のものとしては現在のメキシコ市自身が其の都の跡であったと共に、之れに関する史蹟が国内の各所に多いのである。市の近郊にあつて有名である市北東五二キロ程のサン・ファン・テオチウアカン(Teotihuacán)とアステック

ク語にて神々の住む場所と言う意味だそうである)の古跡の見物に向う。

道路は極めて良い。並木が美しく、沿道サボテン、マグエイ(竜舌蘭)や玉蜀黍の多いのが目につく。マグエイは此の国に昔から存し、又玉蜀黍は征服前に於ける唯一の穀物であり、コルテス軍は到る処で此のマグエイと玉蜀黍との畑を発見したのである。

寒村の土人の家は上の平坦な土造の家であり、カイロ付近、チリ・北部やペルーの田舎に見受けられるものと同様である。

日と月のピラミッド

緑の山を背景にして、大小の、日と月のピラミッドが見える。日のピラミッドは高さ二一六呎、月の方は一四〇呎である。兩者共階段形を為して居り、其の高さと大さに於てカイロ付近のギザの其れに遙に及ばないが、然し外形は完全に保存せられている。而して周囲が緑野であるために、埃及のものが死の沙漠の中にあるのに比して暖みを感じさせ、現代との間の年代の間隔を忘れさせるのである。

此のピラミッドが何時建設せられたかは甚だ不確かである。或は紀元七〇〇年頃に始まる第二のトルテック時代のものと為し、或は遙に紀元前に溯る第一のトルテック時代のものと為す。其れに近づいて内部を見る暇がなかったのを遺憾とする。

我々は両ピラミッドを其れより二キロ足らず離れた荘大な城砦の廢墟即ちLa Ciudadela(ケツアルコアトル Quetzalcoatl の神殿)から眺

めた。

城砦の四角な城壁と内部は驚くべき程完全に残っている。廊下の壁から突出している無数の神話の怪獣の首は唐獅子の頭や巴里ノートルダム(Notre Dame)の怪獸を連想せしむるものがある。

ケツアルコアトルの伝説

ケツアルコアトルなる名称はピラミッドにも付せられている。是れは其の字義よりすれば羽を生やした蛇と言うことであり、トルテックの半神話の半歴史的人物である。其れは風の神であり、又夕の星でもあった。彼れは又偉大な神官又は學者であつて、民衆に土地の耕作を教えた。彼れは當時行われていた人身犠牲に反対する改革的意見を主張したために攻撃され迫害され、再帰を約して東方に向い祖国を去つたと称せられている。

其の階級闘争的解釈

然し此のケツアルコアトルに関しては別個の解釈がある。彼れはツーラ(イダルゴ州、トルテックの古都、アステックの古蹟がある)の王で且つ神官であり、テスカトリホカと言う神の帰依者から追放せられた人物である。トルテック族の中には当時チチメックと言う民衆階級があった。之れに対して首長達、神官、建築家、技術家等は上層階級を構成し、特権を有し有利な社会的地位を占めていた。王国の最高の指揮は神官階級に属して居り、而して此の上層階級の尊崇した神がケツアルコアトルであつた。即ちケツアルコアトルには羽を生やした蛇と夕の星の意味以外に、總ての特権を持った階級と当